様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	国際教育コース／石村　雅雄

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．教育大学教員としての授業実践

本学の目的は，豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し，学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには，教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が，学校現場の実践と関連性が保たれていることが必要である。あなたは，教員養成大学の教員として，本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか，これまでの取り組み状況を総括し，具体的に示して欲しい。

1．目標・計画

現在、我が国の教育システムは、その発足以来と言っていい大きな改革の時期に入っている。それは、学ぶ側からの、学ぶ意欲を出発点とする教育システムの構築を大枠として、従来の、教える側からの、国家・社会からの必要性を出発点とする近代教育システムを凌駕するものとして構想される。

石村は、この課題に対し、大学もまた「現場」である、（大学教員は、教員の教員であって、現在の日本の教育現場を形成する重要な拠点である）と言う当然でありながらも見逃されてきた前提に立って、大学教育現場を見据えた教育システム構築実践を行う。

そのために、①学生の学びたいことを掴んだ、学生の提供する話題を中心に置いた授業提供、②授業者－学習者の相互行為を重視した授業方法、③学生の話す言葉、書いた言葉、の分析に注目した授業を実施するが、本年度はとりわけ、学生中に存在する教職経験者の意見・感想を学部学生に還元することを意識して実践してみたい。

具体的に、本年度は、石村の担当する講義・演習において、「何でも帳」を通じた学習者の意識・意欲の調達（当然、教職経験者の意識・意欲も含む）とそれを介した教授者との双方的実践に取り組むこととしたい。

2．点検・評価

後期の授業においても、授業リフレクションシートを適宜用い、学生の要求、需要に応じた、一人一人の学習者に応じた、現代の学びを展開できた。
中間報告でも記した、毎週120名超の学生に対する「何でも帳」に対するコメント付け、その中から抜粋して印刷物とし、講義で用いていくやり方は、学生にも非常に好感を持って迎えられ、自らが教員になったときに是非この方法を用いたいという書き込み等いただいた。また、この「何でも帳」の抜き刷り作成にあたっては、現職の院生からの書き込みを意図的に採用し、その意見を学部学生に投げ込むことによって、実践に則した制度論、経営論を展開することができた。
但し、紀要の投稿は資料の整理が十分にできず、投稿ができなかった。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

・外国人学生を担当することから、彼らの学習等に関する要求を丁寧に拾うように心がけ、本学での生活が充実したものになるようにサポートする。
・学生の自ら学ぶ意欲を醸成するため、双方的な授業を心掛け、授業Web．ページの開設やそこに記される学生の意見に丁寧に対応するように心掛けること、及び学生達の現状把握に心掛け、形成的評価及び双方向的評価を目指すこと、を目指すため、先進的事例の収集・分析に心掛け、自らの授業に反映できる仕掛けを工夫する。
・以前顧問をしていた阿波踊りサークルの学生からのサポート要請（具体的には、踊りの装束、機器等の手配）があれば、積極的に取り組む。

２．点検・評価

中間報告のとおり、後半も実施することができ、学生との懇親の場（外国人学生が多いところから、廉価で、かつ、たくさんのコミュニケーションをとれる懇親の場）も多く設けることができた。学生の評価もとても高かった。

Ⅱ－２．研究

１．目標・計画

1．授業参観を基礎とした大学教育改善に関する全国的な動向、これまでの実践の整理、および理論構築を行う。
2．フランス研究
　新高等教育法、及び新たな大学評価機関であるAERESの動向に関する資料収集・分析を行う。また、この成果をもとにしつつ、フランスにおける現代大学管理・運営分析に関する総合的分析を進める。本年度も、20世紀初頭の議会資料の収集・分析を中心に進める。
3．発展途上国教育システム研究
　ベトナム・ベンチェー省、パラオ共和及び仏語圏アフリカ諸国（今年度はコートジボアール）の教育システム援助実践を理論的に考察する。そのため国際開発関連の諸業績の収集分析に努めるとともに、該当分野の専門家との研究討議を進める。とりわけ、教育援助を進める上での、周辺分野との協力、現地の自立的開発の進め方を中心に進める。
4．教育政策形成・実施過程研究
　現在の教育に対する住民意識の変容に応じた教育政策形成・実施過程の構築を目指すため、首長　や議会が主要な役割を果たす地方政府の教育政策形成・実施過程の事例研究を進める。

２．点検・評価

中間報告のとおり後半も実施することができた。2の点については、予定通り、最新資料を収集し、『学校六法』への原稿提供もでき、刊行済みである。3については、12月のコートジボアール、3月のセネガルのいずれのフォローアップについても、現地の元研修員と密接に連絡を取り合い、資料収集も順調に為すことができた。この成果は、原稿化ができており、何れかの紀要に報告することになって利。また、ベトナム調査も現地の3学校、600名以上の児童・生徒について為すことができた。この成果は、本年6月の日本比較教育学会で報告の予定である。但し、1の投稿については、投稿に至ることができなかった。資料整理のための工夫が必要だと反省している。

Ⅱ－３．大学運営

１．目標・計画

・大学のより裁量範囲の広い運営を可能にするために、様々な外部資金に応募し、大学独自資金の増額に努める。
・本学の学生の増加による、余裕ある運営を可能にするために、様々な機会に本学への進学を勧める。
・そのために、国際教育コースをより魅力あるものとするための様々な工夫を進めるとともに、宣伝広報活動に積極的に参加する。

２．点検・評価

中間報告のとおり後半も実施できた。とりわけ、大学院受験生の増加については、例年にない成果（10名定員中12名合格）を獲得できた（残念ながら、他学への進学等により、あと1歩、定員を充足できなかったが）。この他、2年連続で、優秀な留学生を紹介していただいている京都の語学専門学校との連絡を取り合い、今後連携を深めていける前提を作ることができた。評価については、四国FD組織の会議に本学教員代表として参加し、本学の進んだ状況について報告することができた。残念なのは、FD委員会の再編により、私がもつ、FDの経験、研究成果を生かすことが来年度は十分にできそうもないことである。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携，国際交流等

1. 目標・計画

・社会との連携：教育支援講師として、要請があれば、積極的に引き受け、専門を少しでも社会に貢献で きるよう、心掛ける。
・国際交流等：平成17年度より続いている、徳島県松茂町のボランティアグループ「はーとふる松茂」のベトナム教育援助事業に専門家として協力し、現地での協力事業の成功に貢献するとともに、それが、松茂町の活性化にも繋がるよう、仕掛けを工夫・提案するとともに、ボランティア実践にも携わる。
・本年度の大学院学生及び研究生（中国）への指導を通じて、当該国との交流拡大に努める。
・国際教育コースに関わる諸事業（サブサハラ仏語圏教員研修、南大洋州教員研修等）に積極的に参加し、事業の発展に貢献する。今年度は特に、フランス語による研修が可能となるように、自らの能力の研鑽に励みたい。

2. 点検・評価

中間報告のとおり後半も実施できた。とりわけ、次の点を記しておきたい。松茂のボランティアグループについては、援助協定締結ができ、十分、専門的な助言を為すことができた。教育支援講師として、富岡西校等学校で、進路指導講演を行った。外国人教員の方に対する諸研修については、参加者との積極的な情報交換を為すことができ、これをもとに、コートジボアール、セネガルの教員組織との連携強化に生かすことができた。姜先生との協議については、その成果から、次回の中日教師教育学術研究集会に2本の研究報告を準備することができた。

Ⅲ. 本学への総合的貢献（特記事項）

特記することはありません。